

「時」の副詞と動詞の係受け制約

1 F - 6

鎌田 海平 湯村 武 西田 行輝
三洋電機(株) 情報通信システム研究所

1. はじめに

我々は日本語における、副詞と動詞の係受けに関して副詞の属性と動詞の属性(特にアスペクト)に着目してその係受け制約について考察した。本稿では、副詞のうち特に「時」の副詞と動詞との係受け制約について述べる。

「時」の副詞と動詞の係受けを制約するにあたってはまず、動詞に助動詞が付随した場合の動詞のアスペクト変化に着目して、「時」の副詞と動詞句(動詞+助動詞)との係受け制約に関して検討した。

同時に、「時」の副詞と、16種類のアスペクトの要素によって18種類に分類される動詞との係受け制約に関しても考察した。

なお、「時」の副詞は、分類語彙表¹⁾に記載されているものから採択し、属性と意味項目によって15種類に分類した。

2. 属性による係受け制約

動詞の属性に関しては、助動詞が付随することによってその属性が変化することが知られている。「時」の副詞と動詞の係受け制約に関してもこの点に注意しなければならない。それは、動詞に助動詞が付随することによるその動詞句の属性変化が、同時に「時」の副詞と動詞句との係受けの制約にも影響を与えるからである。

- (例) ○「急に子供が泣く。」
○「急に子供が泣きだす。」
×「急に子供が泣いている。」

上の例からも、明らかに、助動詞が付随することによって動詞のアスペクトに影響が現われ「時」を表す副詞と動詞句との係受けにも影響が現われている。本稿ではこの点に着目して、副詞と動詞の属性から、できるだけプリミティブなレベルで係受けに関する制約規則を作成することを試みたので、この点について述べる。

2-1. 「時」を表す副詞の分類

動詞と「時」の副詞の係受けの制約を検討するにあたってはまず、「時」の副詞と、動詞のアスペクト素性との共起、さらに「時」の副詞と、助動詞が付いた場合の動詞句との共起を考慮して、副詞の属性に着目しながら「時」を表す副詞を分類した。(図1)

なお、「時」の副詞を分類するにあたっては、動詞句との係受けを意識して分類を行なった。分類規準として属性のほかにも意味的な分類規準が混在しているのもこの点を考慮したためである。

2-2. 助動詞が付随した場合の動詞の属性変化

副詞と動詞の属性からその係受けを解析するにあつ

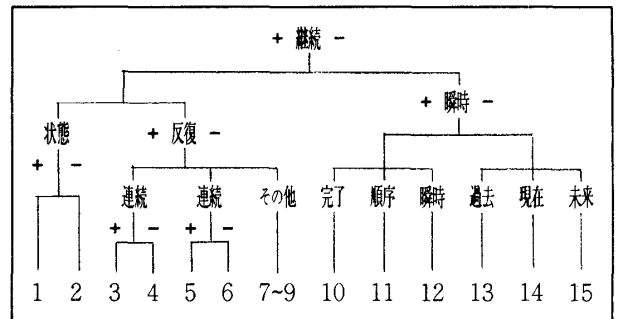


図1 「時」の副詞の分類

ては、まず、「助動詞は動詞に付随して、動詞の属性を変化させ、同時にその動詞が表す動作や状態のある局面を強調する」という点に着目して、「時」の副詞と動詞句(動詞+助動詞)との係受け制約を言語現象から調査した。次に、調査結果をもとにして副詞と本動詞(助動詞、助動詞相当語が付随していない動詞)の係受け制約を調査するという順序で調査を進めた。

たとえば、「ている」という助動詞は、ある時点における動作の[進行]や[継続]を表すか、もしくは、[状態]を表すといえる。

また、「始める」という助動詞は、ある動作の[開始]の局面を明確に表すことができる。

なお、どの種の助動詞が付随した場合に、その動詞句の属性が変化するかに関しては、属性の書き換え規則として助動詞ごとに設定した。

動詞の属性であるアスペクト素性は8つの素性要素[状態、ている、動作、継続、結果、完結、推移、主観]で規定するものとする。この素性要素によって動詞は18の分類に分けた。

以下に動詞「増える」を例にとって、助動詞との接続及びその時のアスペクトの変化を示す。

日本語解析辞書にはあらかじめ、アスペクト素性に関する情報が記述されており、動詞のアスペクトは以下のように設定する。

アスペクト素性が [+状態] の場合 [+状態、-OTH]
アスペクト素性が [-状態] の場合 [-OTH]

(-OTH……他のアスペクト素性が-である。)

《アスペクト素性(ass)》

[+状態、+ている、+動作、+継続
+結果、-完結、+推移、-主観]

《アスペクト(asp)》

[+状態、-進行、-継続、-反復
-完了、-結果、-開始、-終了
-始動、-直前、-直後、-習慣
-経験、-未来、-途中、-実現]

図2 「増える」の属性

「増える」と助動詞「続ける」が接続する場合、図3の接続条件 ass=[+継続] を満たすのでアスペクト素性、アスペクトは図4のように書き換えられる。

| 接続条件 | 属性変化 |
|---------------|---|
| ass= [+継続] | ass=(一継続 、 一結果 、 一完結 、 一推移) asp=(一継続) |

図3 助動詞「続ける」との接続による属性変化

| |
|--|
| 《アスペクト素性(ass)》 [+状態、+ている、+動作、 一継続 一結果 、 一完結 、 一推移 、 一主観] |
| 《アスペクト(asp)》 [+状態、-進行、+継続、-反復 -完了、-結果、-開始、-終了 -始動、-直前、-直後、-習慣 -経験、-未来、-途中、-実現] |

図4 「増え続ける」の属性

2-3. 助動詞連続時の処理

一般に日本語の文章においては、助動詞が連続して用いられる場合が多い。連続した助動詞が付随した場合にどの助動詞が動詞句のアスペクトに影響を与えるのか、あるいは、すべての助動詞が影響を与えるのかなどを考慮しなければならない。

(例)

- ×「私はかつて、京都に住む。」
- ×「私はかつて、京都に住んでいる。」
- ×「私はかつて、京都に住むことがある。」
- 「私はかつて、京都に住ん~~後~~ことがある。」
- 「私はかつて、京都に住ん~~後~~でい~~後~~ことがある。」
- 「私はかつて、京都に住ん~~後~~でい~~後~~があ~~後~~っ~~後~~。」
- ?「私はかつて、京都に住ん~~後~~でい~~後~~ることがあ~~後~~っ~~後~~。」

このように、連続した助動詞が動詞に付随する場合は基本的にすべての助動詞が動詞のアスペクトに影響するものとして係受け制約規則を設定する。

また、「かつて」と「～ことがある」とは係受けが成立しないのに、「～た(だ)ことがある」とは係受けが成立することから他の助動詞が動詞に与える影響と同時に「た」によるアスペクト変化なども考慮して係受けの制約を決定する必要がある。

2-4. 係受け制約規則における前提条件

属性と意味項目によって分類した副詞と、アスペクトによって分類した動詞との間で、分類項目ごとに係受けを考察した結果、それぞれの項目ごとに係受けに関する制約規則を設定することが可能であると考えられる。

表1に副詞分類ごとの係受けに関する制約規則を、本動詞との係受け、助動詞が付随した動詞句との係受けの場合について記述した。なお、制約規則は係受けが成立しない場合の条件を記述している。

ここで、係受け制約規則に前提条件を設定するのは、以下の理由によるためである。

- (例) ×「私はかつて、京都に住んでいる。」
- 「私はかつて、京都に住んでいた。」

「かつて」はその制約規則から、asp=(+状態)の場合は係受けは成立しないように制約される。しかし、助動詞「た」が付随した動詞句とは係受けが成立する。

表1 「時」の副詞と動詞の係受け制約規則

| 副詞分類 | 本動詞に関する制約 | 助動詞付随時 | |
|------|---|---|--|
| | | 前提条件 | 制約規則 |
| 5 | ass=(+結果、-完了) | asp=(-反復) asp=(+状態、-始動) | asp=(+開始) ass=(+推移) asp=(+完了) |
| | ass=(+状態、-ている -動作、-継続 -結果、-完了 -推移、-主観) | asp=(+状態、-進行) asp=(+状態、-直前) asp=(+状態、-結果) | asp=(+終了) asp=(+直前) 意志性=なし asp=(+途中) asp=(+状態、-完了) asp=(+状態、-直前) |
| 6 | asp=(+結果、-完了 +推移) | asp=(-直前) asp=(-完了) asp=(+状態、-結果) | asp=(+開始) ass=(+推移) asp=(+終了) asp=(+途中) asp=(+反復) asp=(+継続) asp=(+状態、+完了) asp=(+状態、+始動) asp=(+状態、+進行) asp=(+状態、+直前) asp=(+状態、+直後) |

助動詞連続時の処理でも述べたように連続して付随する助動詞の中に係受けを成立させるものが1つでも含まれていれば、他にいかなる助動詞が含まれていても、係受けは成立するものとする。したがって、上の例文のような場合の係受けを制約するためには、動詞に助動詞「た」が付随しないことが前提となる。

□助動詞「た」、「ている」の特殊性

助動詞の「た」「ている」などは頻繁に他の助動詞に付随して使われる助動詞の一つである。動詞に「た」、「ている」のみ付随する場合には、係受け制約の規則は本動詞に関する係受け制約規則に従うものとする。

3. 係受け制約上の問題点

日本語解析においては、単語の多品詞が問題になることが多い。副詞の場合も例外ではなく、ある見出しに対して複数の意味が存在する場合が多い。たとえば、「もう」という副詞の場合、「もう忘れてしまった。」のように、「もはや」「すでに」の意味で使われる場合と、「もう来るでしょう。」のように、「間もなく」「やがて」の意味で使われる場合がある。

このような場合、副詞の意味の違いによって制約条件は異なってくるので、副詞の意味が一意に決まらない場合は、どの意味の係受け制約条件を適用するのかの判定は困難である。

4. おわりに

本稿では、動詞の属性をもとに副詞との係受けを考察し、副詞の分類ごとに、副詞と動詞の属性による係受けを機械的に、制約することが可能であるという事を述べた。

【参考文献】

- (1) 国立国語研究所「分類語彙表」 秀英出版
- (2) 井上和子 「変形文法と日本語」 大修館書店